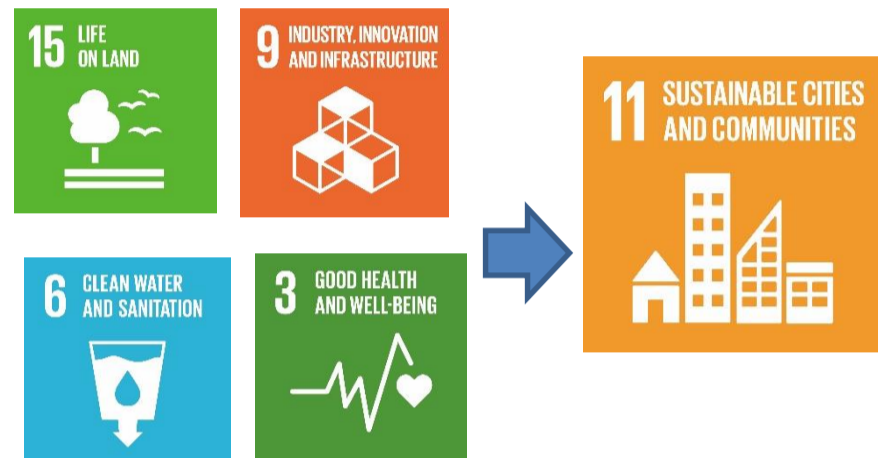


Perspectives of Tokyo Bay Area Towards the Implementation of SDGs SDGs（持続的開発目標）の達成に向けた東京ベイエリアの展望

2017年4月、中央大学理工学部都市人間環境大学院がスタートいたしました。基盤整備・ヒューマンウェルネス・環境を柱とし、国際社会で活躍する人材の育成を目指しています。都市人間環境プロジェクトは、この教育方針を踏まえた演習であり、初年度は、約3000万人の世界最大のメガロポリスを擁する東京湾を対象として、その持続的発展のための問題と課題を抽出し、安全・安心なインフラの整備と更新、豊かな海の自然の再生、人と海の繋がり回復を目標とし、SDGs達成のためのロードマップを創り出すことを目標としています。4月8日、第一回演習では、ゆりかもめで臨海副都心を調査したあと、有明運河、中央防波堤、若洲橋をへて葛西臨海公園まで海上から東京湾を俯瞰いたしました。参加者は、海岸・港湾、コンクリート、計算力学、地盤工学、河川・水文、環境デザインの各研究室の大学院生であり、東京湾という複雑な事象の分析・評価、展望について、1学期をかけて取り組みます。



東京湾 過去・現在・未来

江戸～関東大震災～戦災（1853～1945年）

東京湾は、江戸を支える豊穡の海でした。幕末、黒船来襲に備えて、台場が建設されましたが、現在残るのは、写真にある第三台場と、第六台場のみです。第三台場は、昭和3年東京市が公園として整備したものです。隣接する中央防波堤は、隅田川の河口に位置し、関東大震災や戦災で亡くなられた方々の御遺体が漂着した場所で、永い間、慰霊が営まれてきました。華やかなお台場の地に、ひっそりと時が刻まれています。



未来都市（1970年～）

高度経済成長期、東京湾は埋め立てにより大きく変化しました。なかでも、臨海副都心は、「未来都市」として日本の都市計画が壮大な夢を追い求めた場でした。現在は、様々の商業施設、ホテル、展示場、オフィス、公共施設、住宅などが立地し、活況を呈していますが、基盤整備が開始された1970年代は、埋め立て直後の荒涼とした大地が広がっていました。この地は、別名をレインボータウンとよばれ、自動車と人間の歩行の分離、水辺を公共空間として開放するという原則に基づいて街づくりが行われています。写真は、お台場海浜公園で、貯木場跡地に、砂浜が整備されました。背後の森も防砂林として植樹されたもので、来訪者に緑陰を提供しています。



海の自然の回復（1975年～）

豊穡の海・東京湾の回復と、人と海の繋がりを再生するため、1975年海上公園計画がスタートしました。右の写真は、葛西臨海公園で、埋め立て地の何もない場所に樹木が植えられ、湿地が作りだされ、いまでは深い臨海の森になっています。海沿いには、干潟が作りだされ、野鳥の楽園となっていますが、しかし、広大な東京湾に残る干潟は、葛西臨海公園のほかは、東京港野鳥公園、千葉県の上総野鳥公園などわずかです。海の自然の回復は、陸域からの汚濁負荷の削減などの抜本的施策とあわせて、今後の大きな課題となっています。



未来へ

都市人間環境プロジェクト第一では、

- ・豊穡の海の再生
- ・脆弱性へのイノベーション
- ・ネットワークと水循環
- ・ヒューマンウェルネス

の視点から、東京湾の未来を考えていきます。

